

考古学のおもしろさ

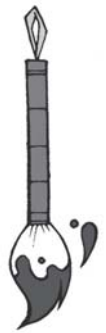
文化財課では、県内はもとより県内外の文化財に関する業務に従事する方々と様々な交流をしています。その交流の中で、「こちらにはありますが、そちらはどうですか?」とか「素材から判断すると平城京内の工房で製作されたのでしょうか、そこから下野まで流通したんでしょね。」といった会話が盛り上がります。

様々な時代の遺跡から出土する遺物の中には、「どこから持ち込まれたのか?」と疑問のまま、長い期間正解が出ないシロモノもあります。考古学の考え方では、①製品としてそのものが流通②製作できる技術者が素材を持参して現地周辺で製作③技術者(情報保持者)が地元の素材で製作④地元でコピーするように類似品を製作などいろいろ考えることができます。

例えば、一万数千年前の旧石器時代の遺跡から出土するナイフ形石器(長さ4~5cm前後の切り出しナイフのような形ですが、槍の先に付けた石の刃と考えられています。)や縄文時代の石鏃(石の矢じり)の素材として使われている黒曜石は下野市内では手に入りません。鬼怒川に行っても拾えません。採掘できる場所が一番近いのは、矢板市高原山の中腹になります。下野市で見つかる遺

物が、近いということだけでここから持ち込まれた素材が使われたかというところばかりではありません。実は高原山のもの多くは、ガラス質の素材の中に白い気泡が入ることから最上級の素材ではありません。気泡や混ざり物の少ない良質の素材は、長野県茅野市などの八ヶ岳山麓、霧ヶ峰、和田峠、伊豆諸島の神津島で産出する黒曜石となります。また、旧石器時代の石器の素材でキャラメルのような色をした頁岩製の石器も出土することがあります。この石材は山形県付近から持ち込まれた素材と考えられています。遺物を調べることで1万年以上前に人々は歩いて日本列島を歩き来していたことがわかります。先ほど述べたナイフ形石器は、下野市内で出土するものとはほぼ同じ「かたち」のものが、シベリア南部から九州地方の広範囲で出土します。列島を超えてモノと情報が行き来していたことがわかります。

本市周辺の弥生時代の遺跡から出土する石鏃(矢じり)の中にアメリカ式石鏃と呼ばれるものがあります。先端部でなく矢柄に装着する側が飛行機の尾翼のように飛び出している特徴的な形をしており、縄文時代にはない形状のもので、本州では東北・北陸地方周辺を中心に分布する資料で



下野市教育委員会 文化財課

す。

同じ「かたち」のものがハワイのお土産屋さんで売られていました。これは実物ではなくレプリカです。アメリカ本土のインディアンが使っているもののレプリカなのですが、その名のおりアメリカでも同じかたちの石鏃を使っています。偶然か?情報が海を渡ったのか?地域が異なっても機能を重視してこの形状になったのか?今のところ正解は???

壬生町の学芸員さんの会話で、「壬生と下野どちらの古墳がいいモノもっているか?」とか「壬生の古墳出土のモノもいいが、下石橋愛宕塚古墳の馬具は良質の金ですね。」とお互いに自慢します。比較すると言葉では言い表せない違い(金色の深みが違う、金らしい金と、銀に近いような金色?)がみられます。夏に6世紀後半の下毛野代表の資料として島根県の博物館に貸し出す予定です。

石鏃図

上: アメリカ式石鏃
下: 一般的な石鏃

